



VI 学部20周年に寄せて
"21世紀に羽ばたく"学部への期待

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 右田, 紀久恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/6891

Ⅵ 学部20周年に寄せて

“21世紀に羽ばたく” 学部への期待

右 田 紀久恵

社会福祉学部創立20周年、おめでとうございます。

教職員・卒業生・学生をはじめ大阪府立大学・大阪府の関係者に心からの祝意と、今日までの努力に対し敬意を表する次第です。

『社会福祉学部10年の歩み』にみられるように、1991年大学院設置までの間の相次ぐ課題と格闘し続けた緊張時代に比べると、その後の10年間は安定と充実の時代ではなかったかと推測し、この時期の蓄積を飛躍台として21世紀に大きく発展しようとする福祉学部の姿がここにあると言えましょう。学部創設10周年記念事業にとりくみ、博士後期課程の体制を整え完成年を目前に退職した者として、万感胸に迫るものがあります。

第二次大戦後、大阪社大は四社大のうちでも西の橋頭堡として、多くの優れた社会福祉界のリーダーや実践者を輩出して来たことは周知の事実ですが、とりわけ社会福祉原理論の双璧（孝橋理論、岡村理論）を、社会福祉学部の礎とし得たことは他に類をみない大きな財産であったことに、あらためて想いを致し懐古や感慨をこえた厳しさを感じています。

大阪市立大学から赴任して以降、定年退職まで、この50年の大半を共に生き、共に荒波をこえて来た子の成人式の想いを抱きつつ、寄稿の機会を与えられたので、以下の二点を期待をこめてのべることにします。

その一つは、21世紀における学術研究の方向への期待です。その方向の一つとして上記の両理論を越えるという課題もありますが、さらに大きく20世紀における諸科学の限界に挑戦するという方向です。つまり、戦後はたして来た研究・教育における蓄積を21世紀に展開させるために、これまでのディシプリンを越えたトランス・ディシプリナリな取り組みが必要だということです。社会

福祉学部の『社会問題研究』には、各専門分野から社会問題に焦点を合わせた数多くの優れた業績が蓄積されています。そこには人文科学、社会科学さらには自然科学のアプローチを援用・応用して社会問題・生活課題を追究する方向があり、様々なディシプリンの協力の成果といえます。しかし、21世紀における学術研究は20世紀の専門化された諸科学の応用の域を出て、それを統合する基礎原理の追求であるといえます。限界としての専門主義的な（社会）科学観や方向を統合し、トランス・ディシプリナリな原理の仮説やモデルの提起、さらにはその構築が要請されていると考えます。この点は、わが国の大学が学部、学科体制のタコツボ的細分化や専門化について見直しがなされていることとも軌を一にします。

社会福祉学が、すぐれて「人間」と「社会」の洞察を基礎とし、人びとの生活課題を研究対象とする限りにおいて、上のような研究の方向をとるべき位置にあり、社会福祉学部の研究スタッフは充分その役割を果しうると信じています。21世紀の研究方向としてのトランス・ディシプリナリ研究は、何よりも「事実」と「価値」の密着性を必然とし、分析的であると同時に価値観的な考察が必要です。社会福祉研究はこれまで、一般的に実践科学であるがゆえに価値中立性が重視されて来ました。しかし、社会福祉が歴史的社会的状況の中での価値意識や実践行為に関わる学問である以上、21世紀への展開には価値中立性を越えるものでなければならないと考えます。

第二は、21世紀の課題としての国際化への対応についてであります。社会福祉学部発足以降、国際交流とりわけ海外の研究者との学術交流に努め、1984年以降は毎年1～3名の海外の研究者による学術講演会の開催、イエテボリ大学との学部間交流等（『社会福祉学部10年の歩み』89～98頁参照）を推進し、21世紀を予測して国際交流を学部運営の大きな柱として来ただけに、これからの学部の発展にさらなる国際交流の推進を期待します。大阪府立大学定年後、東京国際大学に赴任して、国際化のレベルの差に驚き、再び、いま地方の大学においてさへ一層、この点を痛感しています。かつて、学部長在任中に国際交流推進のため、懸案の養護学校教諭養成課程人事枠1名を外国人採用にふりかえ

る申し合わせを大阪府当局とおこない、その人事を教授会に提案したものの実現に至らず、次期学部長への引継ぎ事項となり、早期実現を退職後も鶴首して待つものの果されず、その実現をみていないのは何としても残念であります。しかし、外国人採用の実現を措くとしても、グローバル化の潮流をみるとき多様な方法で国際化への対応は可能だと思っています。OECD や JICA の研修を丸投げ受託することによって、教職員、学生をまき込んだ国際交流を日常化している昨今の経験から、具体的手法で文字通り実践から着実に手がけ、その手法をつみ上げ海外に研究、教育の機能を開き成果を発信していただきたいものです。「大阪」の特色を活かした発信基地として、記念事業企画の言葉にあるように「21世紀に大きく羽ばたくことをめざして」国際社会への大きな飛躍を心から期待してやみません。

(元学部長・名誉教授 広島国際大学副学長)